

live

12+2ユニットが参加した熱いセッション。
部構成にてお楽しみください。

マイ・ライブ

小さい頃から、バンドを組むのが夢だった。

いままで一度も、諦めたことはなかった。

両親は、くだらない、と俺を罵倒した。

教師たちには、何度も説得された。

同級生は、バカだ、と嘲笑った。

そんなことで俺はくじけない。

俺は、俺の信じる道に行く。

誰にも、止められない。

高校を卒業後、俺は上京した。

初めは誰にも相手にされなかった。

それでも、必死の思いで演奏を続けた。

そしてついに俺は、名の通った事務所にスカウトされた。

同志に出会い、俺たちの歌を聴いてくれる人も増え始めた。

ドラマにコマーシャル、アニメにもタイアップしてもらった。

CDは売れるようになり、テレビにもデビューを果たすことができた。

そして、俺はついにここまで来た。目の前には、俺のことを待ちわびている大勢のファンがいる。さ、さすがに緊張してきた。なんといっても、初ライブだからな。俺の歌を、こんなにも大勢に生で聴いてもらえるんだ。本当に、俺はここまで来たんだ。あとは、全力で俺のライブを、俺の人生を聴いてもらうだけだ。

……いくぜっ！

Question which has no correct answer

"What is life? How can I live a happy life?" I said to a kitten.

"I don't know. Because I am not a human, I can't answer the question." She said.

"What is life? How can I live a happy life?" I said to a baby.

"I don't know. Because I have just begun to live my life, I can't answer the question." He said.

"What is life? How can I live a happy life?" I said to my brother.

"I don't know. Never have I thought about such a thing. Why don't you ask adults it?" He said.

"What is life? How can I live a happy life?" I said to the priest.

"I don't know. God only knows." He said.

"What is life? How can I live a happy life?" I said to God.

"I don't know. You are the only people to live your life, so everyone except you can't answer the question." He said.

"What is life? How can I live a happy life?" I said to myself.

"I don't know, and now I know no one can answer this question. I know that this is the question which doesn't have any correct answer. I must find my own answer by myself." I said.

"What is life? How can you live a happy life?" I said to you.

How do you answer this question? Have you found your own answer?

3 空を飛ぶ夢

「だから自転車は危ないって言ってるでしょ。電車で行きなさい」

「遅いからやだ。自転車じゃないと学校遅刻する」

「あんたが起きるの遅いからでしょ」

「あーうるせー行つてきまーす」

いつものように眠い中、自転車を走らせた。自転車よりも遅い電車というのは地元を走ってる路面電車のことである。駅の間隔が狭く信号で止まるうえに線路が遠回りで敷いてあるので、時間もお金も無駄なのである。自転車なら運動にもなるし……といっても40分はさすがにちよつとしんどいけど。

その日はいつもに増して眠かった。夜遅くまで旅行の計画なんか立てていたからだろう。知らない町を目的もなく歩き回るのは好きだが、日程や交通、宿泊のことを計画するのは苦手である。昨夜もそれでこずって眠れなかった。うとうとしながら下り坂に差し掛かったとき、一瞬、目の前が真っ白になった。

気付くと自分の体は空に浮かんでいた。下に広がる見慣れた建物が新鮮に映った。何が起こったのかわからなかったが体が思った通りに進む。これは夢でも見ているのだろうと思ひ、好奇心の赴くまま、川を見つけて行ってみた。この体なら水面を歩くこともできる。川を下っていくと鴨の群れがいたので捕まえようと後ろからゆつくり近づいた。気付いてないのだろうか？全然逃げようとしなない。これなら簡単だと思ひ、捕まえようと手を伸ばしたら、手が鴨の体をすり抜けてしまった。

この夢はどういう設定だ？と思ひながら人通りの多い所に出た。たくさんの人が自分の方向に向かってきては自分の体をすり抜けていく。話しかけても誰も振り返ってはいくれなかった。

誰にも気付いてもらえないのではないか、そういえば夢にしては景色があまりにもリアルに感じられる。考えれば考えるほど不安は大きくなった。あのとき何が起こったのだろう？とりあえず自分が最初の場所に戻ることにした。

おそらく最初にいた場所、その近くで人ばかりで大騒ぎになっていたので行ってみた。そこには白いワゴン車と、変形した……見覚えのある自転車、その先に……血まみれになった自分の体があった。

自分の身に何が起こったかわかったような……でも信じられない……考える間もなく救急車が到着し、自分の体を運んでいった。俺はそこから逃げ出したい気持ちをもぐもぐと抑えて救急車に付いていった。病院に入ると、すでに親が駆けつけていて自分の抜け殻を追っかけ、必死にすがっていた。

僕は手術中廊下で祈ってる親を見ていられなかった。あんなに強がりな親が震えながら神頼みしているなんて……こんな自分ではもう謝ることもできないのか、と思うと悔しさと悲しみが胸がいっぱいになった。

手術が終わり、医者が出てきて親に告げた。「命に別状はありません。ただ意識が飛んでしまったようで、意識が戻るまでは……」

ベッドで寝ている抜け殻を親はずっと見守っていた。そんな親を見ていながら何もできない自分がとにかく悔しかったとにかく意識が早く戻ってくれ……でも意識が戻ったら俺はどうなるんだ？……いや、なんか違う……もしかして医者が言ってた「意識」って……俺のことか！

目が覚めた。親は泣きじやくりながら飛びついてきて自分の名前を呼んでくれた。

「ごめんなさい。心配してくれてありがとう」

親に握られた手が痛かった。

「Dream and live」

長崎県教育委員会が小中学生に相手に「生と死」の意識調査したところ、「死者は生き返る」とした人が15%もいることが新聞で伝えられた。しかも、小学生より中学生の方が割合が高いことがわかった。結果は次のとおりであった。

小4—14%
小6—13%
中2—18%

アンケートの回答で「生き返る」と思う理由で「テレビや映画などで見たことがあるから」が29.2%。「ゲームでリセットできるから」の7.2%には現実とバーチャルとの区別がつかない子どもがいると考えられます。現実を確固たる認識する前に、バーチャルなものに触れすぎている結果として、バーチャルと現実との混同が起こっているのだろう。それは、現代社会がバーチャルなモノを娯楽として得てしまっている以上、それを切り離して、現代社会で子供が成長するのは無理である。そのような状況下で、より「生と死」を確固たるモノとして、認識するには、「生」に対する緊張感、つまりリアルを持つ、ということだと考える。一見簡単そうだが、実に難しいことだと思う。現代社会は「死」を遠くにおきすぎて、現代社会の日常の中に「死」なんて、とてもじゃないが見出せない。

でも、僕等が生きてるのは、確かに有限の「生」であり、その先には確実に「死」がある。そのことを、大人が教えないといけない。しかし、楽なことではない。娯楽としてヴァーチャルな情報にさらされており、『リアルを自然に理解する』とは言えなくなっている。その前提を大人が自覚した上で、人間関係の中で意識的に子どもにリアルな生と死について教える覚悟が必要である。

リアルを認識するからこそ、一瞬一瞬を大切に毎日頑張ろうとするのではないか。永遠に生きることだけを夢見てはいけない。夢を見てもいいが、明日死ぬかのように生きながら、夢を見るべきではないだろうか。

Dream as if you'll live forever. Live as if you'll die today.

—James Dean

My Life

この街に住み始めて早十ヶ月、そろそろ都会の生活にも慣れてきたように思う。とはいえ、やっていることといえれば家と大学との往復ばかりである。ということ、ここでは馴染み深い鉄道についての与太話に付き合ってもらおうと思う。

そもそも、私の実家付近の駅には自動改札など無かった。駅ビルもない。一両編成の列車(“列”車といえるのか?)が走る。電車といえば路面電車のこと、普通の鉄道はディーゼルで走っている。場所によつては単線なんじやなかるうか。それが、である。ここに来て見るとどうだろう。瞬時に通れる自動改札。あらゆるものの揃う駅ビル。いくつもの車両が連なり、発車の際にはVVVF音(注1)が鳴り響く!しかも数分おきに。

スゲー!ここは本当に同じ日本なのだろうかと思つたものである。この衝撃の前には欠点など些細なものと気にならない。ゴメンもちろん嘘です。

そう、ここでその欠点である。なんだか無理やりの展開だなあ、と思う読者の方もいらつしやるかもしれないが、気にしてはいけない。仕様なのである。気のせいなのである(どっちだ)。…おつと話が逸れた。で、都会の鉄道の欠点なのだが、それは勿論、ラッシュ時の混雑である。これはもうたまらない。田舎だとせいぜい座れるかどうかの心配をしていれば済むのだが、こちらはもう大変だ。むしろ座れないのがデフォ!朝なんぞ命の心配すら必要となつてくる。誇張だと思ふ人もいるかもしれないが、滅相もない。少なくとも我が愛用のノートPCなどは一発で昇天である、昇天。もう疲れたよ、など気の利いた台詞なども無く、すぐさま今までの積み重ねがパアである。想像するだに恐ろしい。あとはあれだね、特急とか急行とかそんなの。うっかり乗っちゃうとさあ大変!目的地に止まりませう。ってなんだそれ。おかげでこっちはボーカーフェイスで折り返しの電車に乗らねばならぬ。それはまだいいのだが(いやあんまり良くないけど)、たまにいったん外に出ないと折り返しของホームに移動できないことがあるんですな。引き返すために先に進む切なさといったら。

まあ、そんな感じで細々としたトラブルに見舞われてはいるもののなんとかかとかやってるわけである。多少大げさに書きちゃったけどまあいいよね?じゃあ行つて来ます!

注1:Variable Voltage Variable Frequency,和製英語らしいので注意。なんかみよんみよん言ってるアレ。これがトビシナリと鳴る車両もあると聞いた。

「生きてる理由なんてないけど死にたくもない」

生きるとか死ぬとか。もちろん生き物にも使う言葉ではあるけれど。それ以外にも使うことはある。例えば、ある単語について。その言葉は死語だとか言う。使われている言葉は生きているのか、という疑問もあるけれど。

刀の文化を考えてみる。日本の社会では明治以降に間違いなく死んでいる文化だろう。竹刀とか木刀とかということを考えればまたややこしくなってくるのだけれど。けれど現代に生きている人は意外と刀について色々知っている。日本史やら何やらで学んだということもあるだろうけど、日常の会話の中で使われる言葉からも知ったということはある。一例でしかないけれど、鎬を削るだとか。鎬自体についての説明は不要だろう。それくらい知られている。そう考えると刀の文化はある形では生きているのかもしれない。曖昧だ。こういうのをフアジイというのだったか。

人だって同じだ。脳死だとか、生きる気力がない人だとか。でも結局は生きているかどうかを決めるのは本人とそれを観る人だ。そのどちらでもない人に対しては生きていようが死んでいようがどちらだって同じ。彼は死んでいるんだよ。へえ、そうなんだ。その程度。瑣末で些細。どこかで起きている殺人事件だって他人事でしかない。だからこそ逆に自身が生きているかどうかは確信を持っていなければならないのだろうけど。

アイツがこの村に帰ってきた。

なるほど。例えば？

じゃあまず…乾杯！

お前には彼女がいる。

うめえ！やっぱ本業のやつが選ぶ

酒は違うな。

…なんでわかった？

今日はボトルから缶まで用意してあるから覚悟しとけ。

お前はビールを缶からコップに移してから飲むような奴じゃなかっただろ？

そういや帰ってきたの何年ぶりだっけ？おふくろさんの葬式以来だから5年か？

…すごいを通り越してこえーよ。

そうだな。もう墓参りには行ってきたんだ。親父がいつも掃除してるみただからやることは特になかったけど。

ところで、みんなどうしてる？

相変わらずだよ。あ、綾子が今度結婚する。あとは友紀子と亮二が別れただろ、三村先生が今年で定年退職するし…

そんなとりとめのない話をして彼は三時間後に千鳥足で帰って行った。正直、客が村の連中ばかりだったので、アイツのような“外”を知っている奴と話するのはとても新鮮だった。

人生の縮図もまた一つ増えた。こんなことを楽しいと思ってしまう自分は、この商売に向いているんだな、と妙に嬉しくなった。

…みんな結構変わってるじゃん。なんかお前のところにみんなの人生の縮図が集まってる感じだな。

俺の心に新鮮な空気を入れて奴は去っていった。

そりゃ、酒はいいことも悪いことも増幅するからな。話している内容も濃くなるし、表情も極端になる。それにカウンターにしていると観察眼も磨かれる。

だけど、話しかける前に家中を引っ掻き回すのはやめてくれよ、と呟いて葉草を空っぽなタンズにしまった。

8

親父がやたら転勤するせいで、僕はしょっちゅう学校を変わらざるを得なかった。そのたびに、僕は仲良くなった何人かの友達に別れを告げ、新しい環境で新しい友達を作らなければならなかった。転校の度に悲しくなるのはもう嫌だった。だから僕は、友達を作ろうとしなくなった。煩わしい、と理由を偽りながら。

生の実感

去年の夏。誕生日のプレゼントに、親父が携帯電話をくれた。僕は、欲しいなんて一言も言っていなかったのに。親父は、僕が友達を作ろうとしない理由を知っていた。同時に、友達ができないことに、何だか申し訳なく思ってくれているようにも感じた。だから僕は考えを改めた。

中学生としての時間はもう半年しか残っていなかったけど、僕は必死に頑張った。一人でも多くの友達をつくれるように。最初はなかなかうまくいかなかったけど、卒業までに沢山の友達を作ることができた。卒業アルバムのフリースペースには大量の寄せ書きを貰ったし、また連絡するから、と何人もの友達が言ってくれた。

卒業後、僕は、また離れた場所に引越しをした。

最初は割と頻繁に届いた近況報告のメールも、他愛のない話題の電話も、夏休み前にはほとんどなくなってしまうた。でも悲しくはなかった。なんだ、やっぱりかと、どこか納得している自分がいた。このままの生活をしていても、本当の意味での友達なんて作れないと、勝手に悟ってしまった。

夏休み。ぼーっとしていた僕に、一通のメールが届いた。

「久しぶり！しばらく連絡しないでゴメン。今度、同窓会をするんだけど、戻ってこれないかな？日取りは調整するから」

同窓会当日。会場になった友達の家に着いて、一息つく。どうせ何も話すことなんてないのに、と思いつつ、僕はドアを開けた。そのときだった。

「おーっ、帰ってきた！誕生日おめでとう！」

「向こうの高校はどう？友達できた？」

「今夜の“同窓会”の主役は、おまえだぜ」

盛大なクラッカーの音と共に聞こえるみんなの声。僕はほんとうに戸惑って、みんなに聞かずにはいられなくなった。

「なんで、連絡くれないようになったの？てっきり、もう友達とわれてないんじゃないかって……」

「ああ、そうか。実は、これがばれないように暫く連絡しなかったんだ、ゴメンな」

みんなが、僕の登場を喜んでくれたばかりか、内緒で誕生日のお祝いまで準備してくれていた。僕は、あまりの嬉しさに、感極まった。

今まで「ごめんなさい。もう僕は、友達を作らないなんて言わない。だって、本当の“友達”の、温かさを知ったのだから。」